

ポロとつながるもり



さく・ひじたりあん
え・えーあい

なんとなくな ひび



ポロは いつも まわりと おなじいろ。
きょうも なんとなくで いきている。

「うん……べつに」「なんとなくで いいや」
ポロのせかいは グレーいろ。

ふしぎな おと



あるひ ポロの みみに
ふしぎな おとが とどいた。
「……ポロン……」

それは どこからか かぜにのって、
こころの どまんなかに ふれた。

もりの いりぐち



あしが じぶんでも しらないうちに、
すすみはじめていた。
そこには、
うたう き、おどる はっぱ、ひかりの いずみ。

ポロは “かんじる”ということに、
はじめて であった。

ひょうげんする どうぶつたち



おんぶを たべて はねる ウサギ。
にじのいろで そらに えをかく キツネ。
ひかりの うたを とばす フクロウ。

「なにしてるの？」
「かんじたから、あらわしてるのさ！」
みんな じぶんの “すき” を そのまま
そとに だしていた。

こころが ふるえる



それを みていたら、
ポロの こころが ドクンって ふるえた。
「なにこれ……なんか……すごい」

むねが ぽかぽかして、
なみだが ぽろっ。
ポロの からだに、
はじめて “いろ” が うまれた。

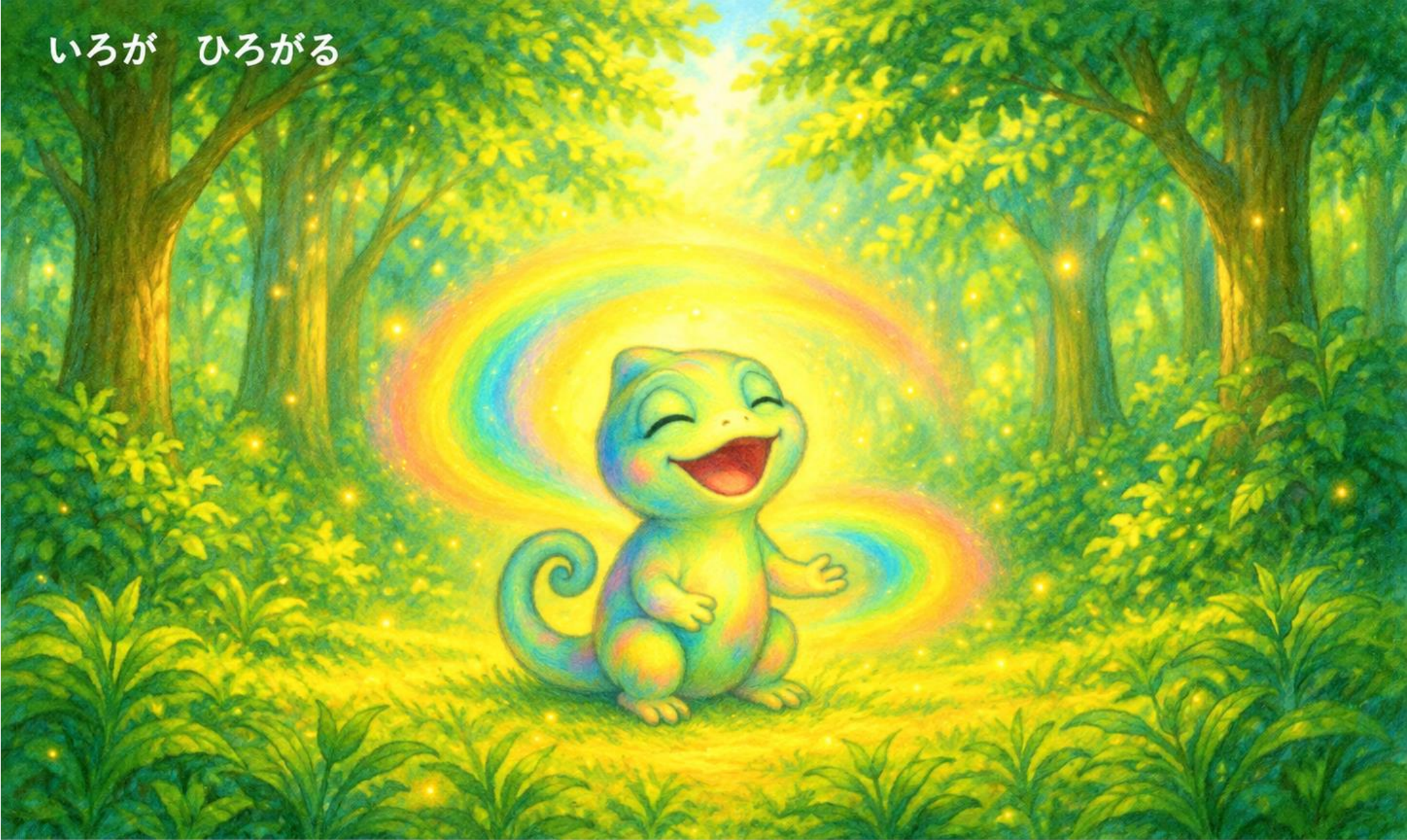
こえを だす



「きみは なにを かんじたの？」
キツネが やさしく きいてきた。
ポロは くちを ひらいた。
でも、ことばは みつからない。

むねが、のどが、
かってに うごいた。
「……ぼくも……うたいたい……」
はじめての こえだった。

いろが ひろがる



ポロのこえに、
せかいが こたえた。
からだじゅうが ひかり、
しらなかった いろが あふれだした。

あお、きいろ、みどり、ピンク、
ポロだけの もようが うまれた。
まわりの もりも、
おなじように ひかりはじめた。

ほんとうの　じぶん



「ありがとう」
ちいさな　こえが、そっと　ささやいた。
ながい　あいだ、ずっと　よんでた。
きづいてくれて、うれしいよ。
ポロはびっくりして、でも　すぐにわかった。

「……ごめんね」
ポロは　そっと　こたえた。
そして　ふたりは、
はじめて　ほんとうに　つながった。

すなおに わかちあう



ポロは わきあがってきた おもいを
みんなに わかちあった。
「ひとりで さびしかった。でも、いま ここに
いられて ほんとうに しあわせなんだ。」

ことばじゃ うまく いえなかったけど、
そのぬくもりは、みんなの むねに とどいた。
「わかちあってくれて ありがとう。
それじゃあ みんなで つくろうよ！」

ともに おどる



ポロの うたに、
ウサギが おどり、
キツネが えをかき、
フクロウが そらを ならした。

それぞれの いろと おとが からまりあい、
うまれていく、
だれも みたことのない“ひかり”。
ポロは なくて わらった。
「ひとりじゃ つくれなかった。」

またひとつ つながる



とおくで ちいさな あしおとが きこえた。
そこには、グレーの いぬが たっていた。
ポロと なかまたちは、
その こえに こたえるように
からだいっぱい うたい おどった。

そのこは たしかに みていた。
こころの なかが、
ちいさく ドクンって なった。

——”シナプス”が、また ひとつ つながった。



シナプスは
あなたから また つながっていく